

# 地域密着型の情報ボランティア

## 地域教育力を大学教育に生かすヒント -

小松 裕子

### 1. はじめに

近年、大学に期待される役割は大きく変化しつつあり、大学の進む方向として、地域社会からの信頼を得、地域と共生を図ることが強く求められている。大学教育においても、他者とコミュニケーションをとることのできる力の養成がより重要となっている。

一方、地域社会の在り方として、伝統的な地縁・血縁に変わる、新時代にふさわしい人と人との関係性の再構築が求められる。こうした場面でも他者を理解・尊重し、他者とのコミュニケーションをとることのできる力がますます必要とされ、ひいては、この方面での大学の積極的な社会貢献が強調されるようになってきている。<sup>1)</sup>筆者は、大学と地域の共生の方向を探ることを目的に、地域情報化支援のボランティア団体の活動に、学生を参加させる試みを続けており、これらの活動を通して培われる他者への理解、他者とのコミュニケーション力を地域教育力と捉えている。

本稿では、大学教育を考える資料として、学生が参加しているボランティア団体（ITネットワークアシストたかおか）の活動について報告する。

### 2. ITネットワークアシストたかおかについて

#### 2.1 概要

ITネットワークアシストたかおか（IT network Assist Takaoka 以下NAT）は、平成13年8月、高岡市住民や勤務者の有志17名で発足し、現在は会員130名を超える。NATでは、高岡市における情報リテラシーの向上や情報ネットワーク社会を生きるための知識の習得・モラルの醸成といった、地域情報化に貢献する諸事業に取り組み、市民生活の質的向上と地域の活性化に資することを目的としている。

具体的には、教育・福祉・地域・技術分野を活動の軸とし、住民への個別支援からサーバ管理まで、住民主体の情報化を推進している。その活動は、個々にプロジェクト化され、会員は、各々のプロジェクトに自由に参加表明するしくみである。また、最近では、富山電腦塾やe-Toyamaなどでの紹介、各種団体からの講演依頼、Microsoft社からの視察（視覚障害者支援）など、高岡市内外からもその活動に注目が集まりつつある。

#### 2.2 NATの特徴

##### (1) 多様な住民の繋がり

会員は約130名であるが、その職業は教員、会社員、自営業、事業者、退職者、主婦、学生と多様であり、また、その年齢も10歳代から70歳代と幅広い。この多様な住民の繋がりを生かした活動がNATの大きな特徴の一つである。（写真1）

##### (2) 多様な活動範囲

活動の範囲は、小学校教員への講習会、高齢者・障害者を含めた地域住民全体への情報



写真1 パソコンサポートの様子  
NAT会員は中学生から高齢者まで幅広い

化支援、さらにはサーバ運営委託事業、小中学生向け講習会、地域住民の情報発信支援企画など幅広く、地域活性化につながるさまざまな活動を展開している。

### (3) 機動力の良さ

活動は各種プロジェクト単位で実施される。新しく企画されたプロジェクトは運営委員会で認められるとすぐに参加者が募られ、実行に移される。定期的な委員会以外に、頻繁にミーリングリストで情報交換がされ、会員全員に活動の情報が共有される。こうした情報共有と機動力の良さがNATの持ち味である。

### (4) 会員自身の活動のひろがり

NAT会員向けパソコン講習などで支援を受けたり、一つのプロジェクトへ参加したりすることで、新たに別のプロジェクトへの参加のきっかけとなり、自らの活動と視野をひろげる人も多い。

### (5) フェースツーフェースの重視

NATでは、運営委員会、全体会、各プロジェクトの連絡や突発的な問題を含め、常にミーリングリストが使われる。その一方で、オフラインミーティングや勉強会を頻繁に行うことで、ネット上では解決できない問題の早期発見や会員同士の相互理解を深めている。基本的には現実社会の人の繋がりを重視しているのである。

## 3. 活動の詳細

本章では、NATの活動(プロジェクト)について、福祉、教育、地域、技術などの分野ごとに代表的なものを紹介する。なお、各プロジェクトの多くは、分野をまたがって実施されており、会員は複数のプロジェクトに同時に参加している。

### 3.1 教育分野

#### (1) ネットデイプロジェクト

本プロジェクトは、平成13年度の主たる活動で、NAT活動の源泉とも言える。当時、高岡市の小学校のネットワーク整備の遅れが問題視されており、高岡市内の小中学校4校の校内にイーサネット配線を張り巡らせる活動を始めた。実際の工事の前には、工事を担当する小中学校教員やPTAへの勉強会を開催し、終了後も利用を促すための講習会を開催した。平成13年度の当プロジェクトへの参加者は731名にのぼる。こうした活動が契機となって、平成14年度夏には、高岡市内すべての小中学校にCATV回線でのインターネットの利用ができるようになった。

この教職員やPTAを対象にした講習会は、平成14年度、15年度にも引きつがれ、2年間の講習会参加者は274名である。その後教職員向けの講習会では、写真や画像・動画を使ったデジタル紙芝居やプレゼンテーションソフトでの副教材づくりに発展した。

#### (2) 100年プロジェクト

100年プロジェクトは、高岡の地に深く関わる歴史や文化にスポットをあてて、情報のデジタル化を図っている。現在は、昭和20年代から40年代の高岡市小学校視聴覚教材の2万枚にもものぼるスライド(写真2)と、童話「とべないホタル」の著者でもある小沢昭巳氏撮影の万葉集に関するスライドを、整理しデジタル化して利用し易くすることを当面の目標としている。構成、デザイン、音楽、書道、詩、ホームページ作成などいろいろな役割を会員で分担しながら、勉強会形式で実施しており、焦らずに一步步100年でもかけて実現していこうということから「100年プロジェクト」と名付けられた。



写真2 国分寺(伏木)  
100年プロジェクトで再生した写真教材

### (3) ロボットプロジェクト

平成15年度より、児童を対象に、LEGOマインドストームを使ったロボット製作やそのプログラム作成の講習会を実施している。平成15年度は、主にNAT会員の児童や生徒を対象に講習会を実施し、平成16年度は、広く高岡市内の小学校で参加者を募集した。NATの成果発表の場であるITフェスタにてロボット体験コーナーを設けたり、作成したロボットのコンテストを実施した。(写真3)



写真3 ロボット体験コーナー

### 3.2 福祉分野

福祉分野では、障害者がITを活用できるような環境構築を目指し、その支援を行える人材の養成と実際の支援活動を行うことを目標にしている。活動のきっかけが、視覚障害者への支援からはじまったこともあり、福祉プロジェクト全体を「愛EYEプロジェクト」と呼ぶ。当面、視覚障害者支援活動を継続・発展する予定であるが、他地域の支援団体と情報交換を行うなど、さまざまな障害への理解を深めることも試みている。現在では、このプロジェクトに参加する人数が一番多く、活動も非常に活発である。

#### (1) 愛EYEプロジェクトの支援体制

平成13年の統計によると、日本全国の視覚障害者は30万1千人で、障害者の約10%を占める。そのうち、インターネットや電子メールを利用している人は、6千人(2%)とわずかである。<sup>2)</sup>その背景には、情報入手手段として、パソコンやインターネットに関心を持っていても、視覚障害者を支援する体制が整っていないことが考えられる。

そうした状況の中で、本プロジェクトは、視覚障害者自身が積極的支援者となって活動する体制をとっている点の特徴である。また、晴眼者ではじめて活動に参加する時には、アイマスクをつけて歩く体験をし、視覚障害者への理解を深めるきっかけをつくっている。(写真4)

また、戸別訪問での支援には、晴眼者と視覚障害者がペアになって、障害者宅へ出かけて支援をする。支援者としての視覚障害者は、晴眼者には気付かない細やかな部分まで支援でき、一方、晴眼者は、視覚障害者には見えない部分を補助するなど、互いに補完しあうことで支援の質を高めている。現在は、新しい訪問規則に基づいた支援を実施する他、基本的な勉強会と次の段階に進む人への勉強会を定期的実施するなど、レベルに合わせた対応をしている。(写真5)



写真4 アイマスク体験  
(学生の体験の様子 盲学校にて)  
愛eyeプロジェクトでは、初回に必ずアイマスク体験を実施



写真5 愛eyeでの勉強会(学生と視覚障害者)

## (2) 教材づくりと勉強会

パソコンやインターネットの学習方法として、パソコン利用手順をCDとテープに収録した教材を作成し活用している。この教材により、これまで支援者によってバラバラになりがちであった支援内容の標準化を図ることができると同時に、晴眼者にとっても、支援の為のよい学習教材となっている。支援者・被支援者ともテープ学習を修了したものだけが、ステップアップした勉強会に進むことができるシステムとし、勉強会の質を維持している。

## 3.3 地域分野

地域分野では、住民及び勤労者の生涯学習や地域コミュニティ活動を情報面から支援すると共に、地域に根ざした新しい情報生活を考えるきっかけづくりとなる活動を目指している。

### (1) パソコンなんでも相談会

平成13年度に全国一斉にIT講習が実施されたが、これを機にパソコンを利用し始めた人は多い。しかし、その後のフォローは自治体が各自の努力にまかされており、継続した支援が不足している。高岡市においても、一人では操作が不安である、質問をしたいがどこに聞けばよいかわからないという切実な声を耳にすることが多く、地域住民を対象にした「ITおさらい相談会」を開催することにした。現在は「パソコンなんでも相談会」と名前を変更して継続している。(写真6)



写真6 パソコンなんでも相談会  
ほぼ相談者一人に一人の手厚いサポートが好評

平成13年9月以来、平成16年11月までの開催は45回を数え、相談者はのべ578名、NAT支援者は405名で、合わせて1063名の参加者である。相談内容は、基本的なパソコンの扱いからウィルス駆除などさまざまであるが、幸いサポーターには専門技術知識や支援経験の豊富なものも多く、ほとんどの質問に応えることができている。最近パソコン持込者も多く、備え付けのものでなく、自分のパソコンでの支援を切望する人が増えている。

### (2) 視察

会員の視野や活動幅を広げる目的で、国内外を問わず、さまざまな情報化に関する視察と交流を実施している。これまでの視察場所は、三鷹、桐生(平成14年度)、フィンランド(平成15年度:富山県民の翼事業、福祉プロジェクト主催)、福光(平成15年度)、横浜(平成16年度、パソコンボランティアカンファレンス参加)である。

### (3) パソコン支援者養成講座

平成15年2月、高岡短期大学にて、パソコン支援者を養成するための講座とシンポジウムを、神奈川県のパソコンボランティア(DNY)と合同で実施した。講習会受講者40名、シンポジウム50名、NATスタッフ30名の参加を得、支援する側の教育の場を初めて設けることができたとともに、支援者養成の重要性を再認識することができた。平成16年度末には、訪問・個別・集団などあらゆる場面での支援の際のマナーを主とした研修会を計画中である。

## 3.4 技術分野

NATの会員がコンピュータ機器の利用方法、各プロジェクトへの技術の適応方法など、相互に学ぶ機会の提供、および、資料を体系化し維持管理できる技術面からの支援を目的としている。

### (1) NAT内学習会

NATの総会や全体会では、会員向けの学習会を随時実施している。これまで、ホームページ、パワーポイント、画像処理、セキュリティなどを取り上げてきたが、平成16年度には、各プロジ

ェクトから発展した勉強会や独立したプロジェクトとしてC言語勉強会が新たに立ち上がるなど、会員の学習意欲の向上とレベルアップを目指している。

#### (2) Webプロジェクト

広く市民にNATの活動を理解してもらうためにNATホームページの充実を行っている。また、高岡市とともに、高岡のあらゆる情報の窓口となり、交流の場ともなる地域ポータルサイトなどの企画・検討や作成に参加している。

### 3.5 ITフォーラム

これまで述べたような活動の集大成として毎年秋に、地域住民が広く参加できるような活動報告会形式のフォーラムを開催している。地域とNATの共同活動を図るとともに、会員同士が互いの活動を知り、交流を深める機会でもある。毎年10以上のテーマブースを開き、プロジェクト活動や新しい企画の紹介を行う。写真7は、平成14年度のフェスタでのLANケーブル自作コーナーの様子である。

平成16年度は、各ブースの紹介を高校生の技術分野のプロジェクトリーダーがインターネットライブ中継を企画した。また、ビデオ編集のおもしろさを伝えるために特撮「NATらマン」の上映を行うなど工夫を凝らした内容が多く、約550名の来場者を迎える事ができた。



写真7 ITフェスタにて  
NAT会員から指導を受けてLANケーブルを自作する  
高岡短大の学生たち

## 4. 今後の課題

### (1) 安定した財政基盤の確立

各事業の推進費は、高岡市からの補助金と会費、サーバ運営管理費が収入科目で、各プロジェクト活動費、および、ITフェスタの会場設営・運営費に使われる。今後、市からの補助金が減額されることも考えられ、補助金に頼ることのない財政的基盤をどうつくるかが課題である。

### (2) 法人化の是非

法人化を図り、組織と財政的な基盤を強化することも検討しているが、その一方で、法人化による活動の制約を懸念する声も多く、これについては、そのメリットとデメリットを十分な時間をかけて、会員の合意をとることも必要である。

### (3) 事務拠点の補強

平成16年度より、これまで高岡市情報政策課にあった事務局を、高岡市京田に移し、独立した事務所として設立した。しかしながら、会員の多くが他に仕事を持ち、常勤することができず、現在は、勉強会や打ち合わせに利用するだけの場となっている。また、一部の会員に管理の負担がかかることもあり、早急な事務局体制作りが必要である。

### (4) 活動会員への掘り起こし

会員数は130名を超えてはいるものの、実質活動者の固定化の兆しがある。もちろん、さまざまな支援活動への参加形態があるため、一概に固定化することが悪いとは判断できない。しかし、他のボランティア団体においても、活動者の固定化による弊害は多く報告されていることから、活動会員への掘り起こしが求められる。特に、NATの場合、活動自体がダイナミズムである特徴をもつため、個々人のより積極的な参加表明が必要となり、それを負担と感じる会員もいる。その点に配慮しながら、活動への参加を促す仕組みをどう作るかが課題である。

## 5. 学生が活動に参加することの意義

NATのボランティア活動のうち、学生が参加しているプロジェクトは、地域分野の「パソコンなんでも相談会」、福祉分野の「愛EYEプロジェクト」、全体活動の「ITフェスタ」の3つである。学生は、筆者の卒業研究を履修する情報コース2年生で、これまで4年間で34名が参加してきた。学生は、本ボランティアとは別に、本学の公開講座「中高年のためのやさしいパソコン入門」や山田村での「高齢者やさしいパソコン教室」で支援者としての経験があり、情報化支援に対する興味と関心がある学生といえる。

「パソコンなんでも相談会」は、毎月第2日曜日に高岡市青年の家で実施しており、学生は支援のほか、受付、相談カルテの整理などを受け持つ。また、「愛EYEプロジェクト」では、視覚障害者と一緒にパソコンの支援テープを聞きながら、より汎用的なテープ作成を検討することに挑戦している。平成16年度の「ITフェスタ」では、スタッフとして参加するだけでなく、卒業研究でとりあげた要約筆記の実演や体験支援を実施し、自らの研究成果を広く発表する場を提供していただいた。(写真8)

こうした支援活動の一番大きな意義は、活動そのものによって構築される新しいコミュニティの中で、自分自身がどの様に関わるかを考える機会が与えられることではないかと考える。<sup>3)</sup>

地域と大学という視点から考えると、当然、ボランティア活動に参加するだけで学生が成長するというわけではない。大学が地域と学生の間に効果的に介在するには、学生の興味関心または専門分野により近いもので活躍できること、大学での学習の成果を発揮できる場を提供することにポイントを置くことも重要である。



写真8 ITフェスタの相談コーナー  
短期大学生がスタッフとして支援後のポスターは研究発表の一部

## 6. おわりに

NATは、高岡の地に根ざし、地域の活性化、地域住民の充実を手助けすることを活動の基本に置く情報化支援団体である。本稿では、学生の参加を柔軟に受け入れ、地域に密着して情報化の手助けをしているNATについて紹介した。

一般に、こうした地域ボランティア活動に大学生が参加することは自然なことであり、また、その活動において他者を理解しコミュニケーションをとることは、ある程度可能であると思われるがちである。しかしながら、学生自身が、地域に目をむけ、地域の中の活動を知る機会は、実際のところそう多くはない。本来、ボランティア活動に共感を覚え、自ら参画することは、学生個人の問題ではあるが、もしその手助けが必要ならば、それは大学の教育上の一つの役割として位置づけることができると考えている。

平成18年度より、本学は新富山大学として新1年生を迎える。現在、高岡キャンパスの1年生リテラシー教育の方向として、自ら考え解決する力を涵養するための教育を検討している。筆者は、これらの力の根本にあるのが、今回のテーマである、他者を理解・尊重し、他者とのコミュニケーションをとることのできる力であると考え、それを地域活動から養う試みについて紹介した。

現在NATには、本学卒業生や本学退職職員も正規会員として積極的に活動している。卒業生の一人は、来年度より地域プロジェクトのリーダーとなることが運営委員会で了解され、今後の活躍が期待されている。今後卒業生と在校生が地域活動の場であまり刺激しあう機会を増やすことも、地域の教育力を効果的に生かすことになると考えている。

最後に、今回紹介しきれなかった活動や日々更新されるさまざまな活動については、NATホームページを参照していただきたい。<sup>4)</sup>

#### 謝辞

NAT会長はじめ各プロジェクトの皆様には、毎年学生を快く受け入れていただいております。手厚いご指導に感謝し、ここに深くお礼申し上げます。

#### 参考文献

- 1) 文部科学省中央教育審議会大学分科会：「我が国の高等教育の将来像」審議内容中間とりまとめ，平成16年9月19日  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/toshin/001/04100401.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/toshin/001/04100401.htm)
- 2) 厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部：身体障害児・者実態調査結果（平成13年6月1日調査），平成14年8月  
<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2002/08/h0808-2.html>
- 3) 小松裕子：情報支援活動を取り入れた情報処理教育の展開，平成15年度情報処理教育研究集会講演論文集，pp.271-273，平成15年11月
- 4) NAT公式ホームページ：<http://www.e-nat.org/>